

徳川時代ノ人口

講師 本庄榮治郎

徳川時代
との人口比較

大正十二年調査

大正市

我國上古既ニ戸籍ノ制アリ。大寶令ニ至リテソノ法大ニ備ハルト雖、全國戸口ノ數ヲ確實ニ傳
ノルモノナシ。近世徳川ノ世ニ於テモ、享保以前ノ人口ニ就テハ未タ之ヲ詳ニスル能ハサル也。

寛文元年

蓋全國人口ノ調査ヲ命シタルハ八代將軍吉宗ノトキニ始マル。享保六丑年六月ノ令ニ曰ク、

二五七年以前

『諸國領知之村々、田畑町歩、郡切ニ書記、并百姓町人社人男女僧尼等、其外之者ニ至ル迄、人數都合領分限ニ書付、可被差出候。奉公人并又者ハ不及書出候。』云々(六月二十一日)

二六八年七月

『一、諸國領知之村々田畑之町歩、并人數等、可書出旨、先達而相觸候。云々

明和二年

一、百姓町人社人男女僧尼等、其外之者共迄總人數書出候ニ付、是又此度被改候ニハ不及候。其所々ニ相知レ有之候帳面之人數、可被書出候。尤二重ニ不成又ハ不登錄ニ可被相心得候。

一五七年以前

一、人數之儀、去年分成長、當年分成長、委テ相知レ候人數高認メ可被差出候。左候ハ何之年之人數高ニ候トノ儀、可被書載候。且又何歳以上認候ト申譯書加ヘ、可被差出候。但奉公人并又者、書出ニ不及候旨相違候ハ、勿論武家方計ノ儀ニ候。云々

二二三年五月

(六月二十九日)

天明七年

更ニ享保十一年二月ノ令ヲ見ルニ、曰ク、

一三五年以前

『一、去ル丑年被差出候通、諸國領知之百姓町人社人男女僧尼等其外之者共迄、不殘今年相改、總人數、郡切ニ書記、領分限ニ可被差出候。此度ハ田畑町歩被差出候ニ不及、人數計書付、當四月ヨリ霜月迄之内、勝手次第可被書出候。尤何月改何歳以上認メ候ト申譯書加可被申候。且又武家方奉公人并又者ハ書出ニ不及候事。』

三七五年以前

天明三年

大饑饉ニ依ル

論 説(一)

徳川時代ノ人口

第二卷 第五號

1) 勝伯爵吹塵録第五册、2頁以下。徳川禁令考第六巻515頁以下。内藤耻叟氏、徳川七代史八編、4頁。徳川禁令考第六巻516頁。徳川十五代史八、117頁。

天保九年

論說(三) 徳川時代ノ人口 二

第二卷 第五號

八七年次

三三六、七七三人

天保七年

凶作及全八年タルニ過キササル也。

大益年ハ即リ

乱ニ依ル

久々元年

三〇八、一九二人

明治元年

五七、一、三〇六

二八、一、三〇六

全九八年

二七年

八八、六、六六六

全世八年

七年

六九、九、五八八

一、向後ハ相觸候ニ不及、子午ト午年ニ今年之通可被心得事云々

今右ノ二令ヲ比較スルニ、享保六年ノ令ハ同年ニ於テ特ニ戸口ノ調査ヲ命シ、ソノ結果知り得タ

ル人口數ヲ届出テシメタルモノニ非スシテ、當時既ニ舊簿ニヨリテ知レオリシ人數ヲ注進セシメ

6頁。徳
三號。氏
一、井原
二、上段
十九卷、
第九、二
第、二〇
雜、第五
誌、卷、
學、大辭
統、辭
考、辭
人、口
來、前
古、新
本、日
大、日
井、上
瑞、枝
士、士
井、內
上、田

大正元年

九年

三三一九九四人

全九年

五四年

二五三九七二人

全十年

二七四年

一五七六七八人

全十一年

三三三九九五人

全十二年

三二二八八八人

(註) 然ラハ當時戸口ノ調査ヲ爲サスシテ、直チニ右ノ如キ人数ヲ注進シ得タルハ如何ナル理由ニ基クヤ。是レゾノ當時既

ニ戸籍ノ存シタルニ由ル也。勿論當時ニアリテハ幕府ハ戸籍法ヲ制定シテ一般ニ行ハシメタルニ非ス。ソノ初メニ當リテハ名

主等カ必要ニ應ジテ人別帳ヲ製シ置クニ過キサリシガ、寛永以後耶蘇教ノ禁制嚴重トナリ、宗門改テ行ヒ、各戸所屬ノ寺院

ヲ定メ、僧侶ヲシテ其宗ノ檀徒ニシテ耶蘇宗門ニ非ル旨ヲ證セシムルニ及ンデ、所謂寺請證文ナルモノ行ハルルニ至レリ。

然ルニ寺請證文ハ一戸若クハ數戸ヲ證明スルモノナレバ、家口ニ就テハ人別帳ト對照セサレハ明カナラス、好濫ヲ生シ易キ

ナ慮リテ遂ニ宗門人別改トイフ事始マリ、宗門人別改帳ヲ製スルニ至レリ。而シテコノ宗門人別改帳ハ毎年必ス宗門改奉行

ニ提出シタルモ、人別帳即チ普通ノ戸籍ハ名主ノ許ニ置クノミニシテ、王制ノ古ノ如ク、定ノ方式ノ下ニ嚴格ニ調製セシモ

ノニ非ス。加之、或ハ人別帳ニ僧侶ノ證明ヲ附シテ宗門人別改帳トナスアリ。或ハ宗門人別改帳ニヨリテ人別帳ヲ製スルモ

ノアリ。寛文十一年ノ令ニハ「其方御代官所耶蘇宗門改之儀、被入御念由ニ候得共、彌無油斷可被申付候。向後者百姓一軒

ツツ人別帳ニ記之、一村切ニ男女ノ人数寄テ致タシ、又一郡切ニ成トモ都合ナシメ、自今己後無懈怠被申付、帳ヲ作り、手

前ニ被差置、(中略)御代官所之男女他所エ縁付、并奉公ニ遣之勿論、令死去滅候分、他所ヨリ來候者有之而増之分、差引無

相違、男女モ年齡ヲモ銘々書印候様无候。宗門改計不限、諸事被爲除、可然事候間、可被得其意候。(下略)トイヒ、宗門

帳ヲ以テ宗門改メ以外ノコトニモ利用スルヲ許セシホドナレハ、宗門人別改帳ト通常ノ人別帳トハ往々混淆スルコトアリシ

カ如シ。此ノ如ク人別帳アリ、宗門人別改帳アリ。以テ各村各郡ニ於ケル戸口ヲ知ルニ足ル可シ。是レ享保六年ニ於テ別ニ

戸口ノ調査ヲナサス、舊籍ニヨリテ當時最近ノ人口數ヲ知り得タル所以ナラスンハ非ル也。而シテカクノ如ク人別帳ニヨリ

テ其地ノ人数ヲ計算シ、之ヲ注進セシメタルコトハ、既ニ家光將軍ノ寛永二十年ニ其事例アリ。當時ノ令ニ曰ク「代官キリ

ニ其代官所ニテ、人数帳ニ作、伊丹加齋、曾根源左衛門手前ニ可儀事」ト。然レトモコノ令ハ單ニ諸國ノ代官ヲシテ、其治

下ノ人口數ヲ記シタル帳簿ヲ勘定頭マテ進達セシメタルニ止マリ、全國ニ及ヒタルモノニ非ス。之ヲ全國人口ニ推シ及ホシ

タルハ享保六年ヲ以テ始メトス。故ニ享保六年ノ令ハ全國人口調査(狹義)ノ端ヲナサスモノトハ認ムルコトヲ得サルモ、全

國人口ノ注進ヲ命ジタル最初ノ事實トシテ、ソノ意義ヲ有スルモノ也。

(註) 二徳川實記享保八年三月晦日ノ條ニ曰ク「去シ丑ノ年ノオトク、諸國ノ戸口タダサルニヨリ農商社人僧尼等マデ、ク

ハシク記シテ呈スヘシ。田畝ノ町歩ハシルスニ及バズ。四月ヨリ十一月マデニ呈スベシ。某ノ月檢シテ幾帳トイフコトシル

8) 以上主トシテ萩野博士、前掲、1362-1365頁ニ據ル
9) 萩野博士、前掲、1352頁

スベシ。武家ニツカフルモノ、井ニ輿俗ノ類シルスニ及バズトナリ。今ヨリ後ハ更ニ令セラルマジキニヨリ、子午ニアタル年ハ必呈スベシトナリ(日記、享保通鑑)ト。是レ果シテ享保六年ノ如ク舊簿ニヨリテ人口數ヲ驗出セシメシモノナリヤ、又ハ享保十一年ノ如ク、特ニ人口調査ヲナスヘキコトヲ命シタルモノナリヤ、未タ明カナラス。故ニ姑ク享保十一年ヲ以テ人口調査ヲ命シタル始メトス。クダ子午兩年ニ人口數ヲ報告セシメントスル制度ハ、コノトキ既ニ定マレルカ如シ。尙日本社會事業三版下卷二二五頁下段ニハ、享保八年ノ人口數一七、四三三、六五二人トアルモ、之ヲ享保六年及ヒ十一年ノ數ニ比スルニ非常ナル差異アリ。信ス可ラス。

(註、三)思フニ子午造籍ノ制トハ次ノ如キ事實ヲ指スモノナラン。日本書紀孝德天皇大化元年八月ノ條ニ曰ク『拜東國等國司、仍詔國司等曰、隨天神之所奉寄、方今始將修萬國、凡國家所有公民、大小所領人衆、汝等之任、皆作戶籍、及校田畝、其國池水陸之利、與百姓俱、(中略)其於倭國六縣被遣使者、宮造戶籍并校田畝』ト。ツイテ同二年(丙午)正月ノ條ニハ(上略)其三日、初造戶籍計帳班田收授之法トアリ。又白雉三年(壬子)夏四月ノ條ニモ是月造戶籍ト云ヘリ。戸令ニ曰ク『凡戶籍六年一造、起十一月上旬、依式勘造、里別爲卷、總寫三通、其總皆注其國其郡其里其年籍、五月三十日內訖』云々ト。

二

然ラハ將軍吉宗ガカクノ如キ全國人口數ノ調査ヲ命シタルハ、果シテ如何ナル目的ニ出ツルヤ。或ハ之ヲ以テ詳カニ歳費ノ出納ヲ計算センカ爲メナリトシ、或ハ當時窮乏ヲ告ケ居タリシ幕府ノ財政ヲ整理センガ爲メナリトス。然レトモ這般ノ人口調査ハ全國ニ及ホセシモノニシテ、幕府直領地ニ限リタルモノニ非ス。又當時ノ租税ハ主トシテ農民ノ負擔スル所ナルガ故ニ、農民數ノ消長ハ、間接ニ財政上ニ影響ヲ及ホスヘシト雖、運上冥加ノ如キハ、多クハ商工營業者團體(商屋、仲魁)ヨリ上納スル處ニシテ、一般商工民ノ數ト關係ナキノミナラズ、當該團體員ノ數ニ對シテモ關係ヲ有スルモノニ非ス。然ルニ當時ノ調査ニ於テハ、密ニ農民ノミナラズ、一般商工民及ヒ其他ノ員數ヲモ計算シ、又後ニ述フルカ如ク、御朱印地、除地、地子免許地ノ住民數ヲモ漏レナク計

10) 井原氏、前掲書、453頁
11) Droppers, ibid. p. 260.

上スヘキコトヲ命シタルニヨリテ之ヲ觀ルモ、人口調査カ財政上ノ理由ニヨリテ行ハレタルモノナリトハ信スルコトヲ得サル也。然レトモ又一方ニ於テハ、吉宗ノ治蹟ノ主要ナルモノニ就テ、之ヲ觀ルニ、ソノ孰レガ人口調査ノ結果トシテ、特ニ行ハレシモノナリヤヲ推スヘキ事項ヲ發見スルコトヲ得ス。又余ノ涉獵セル二三ノ史料中ニモコノ點ヲ明示セルモノナシ。而モ後ニ述フルカ如ク、更ニ大藩十家ニ對シ、享保十七年以前、七八十年間、封内ノ人口ヲ總計セルモノアラハ、有ルニ任セテ差出スヘキ旨ヲ命シ、人口増殖ノ狀態ヲ知ラント努メシカ如キヨリ考フレハ、何等カ施政上關係スル所ナカル可ラス。然レトモ特殊ノ目的ヲ有セシコト明カナラサル以上ハ、之ヲ以テ廣ク施政ノ參考ニ供セリトナスハ、一見空漠ニ失スルカ如シト雖、實ハ最モ隱當ナル說トイハサル可ラス。

三

今ヤ進ミテ人口調査ノ方法ヲ説カンニ、先ツ寛延三年¹³⁾及ヒ文化元年¹⁴⁾ノ令ニ曰ク、

一、諸國人數之儀、御料ハ御代官、私領ハ領主ヨリ、去ル子年之通、當年相改、春中ヨリ十一月迄、書付差出相揃、同十二月集之、一册ニ成候事。(文化元年ノ令ニハ、去ル子年之通、當年相改、春中ヨリ十二月迄書付差出、集之登册ニ成候事トアリ)

一、男女人數拾五歳迄之内、領主ニ而相改候格例ナリ以、改出候ニ付、年齡不同モ有之候事。

一、御朱印地、除地之寺社領人數モ諸國人數之内ニ籠リ候事。

一、江戸、駿府、京、大阪、奈良、堺、伏見、大津、長崎等之町家地子免許之場所、并諸國城下町地子免許之地之人數モ、勿論總人數ニ不漏事。

一、向後モ不及相觸候、子年ト午年ニ前々之通相改差出候格之事。

一、武家方奉公人、并又者ハ諸國人數之内、相除候事。

12) 内田藤士、徳川吉宗、經濟大辭書六卷2903頁上段。
 13) 西山元文、官中秘策卷一。今井武夫、有徳公ノ人員調、スタチスチツク雜誌二二號、22頁。
 14) 吹塵錄五、9頁。

今、之ヲ前述ノ享保十一年ノ令ト考合スレハ、當時ニオケル人口調査ノ方法範圍ハ略ホ明カナルヲ得ン。

(一) 調査ノ時期。ハ子午兩年ニシテ、即チ六年目毎ニ之ヲ行ヒ、同年中ノ一定期間マデニ調査數ヲ報告スヘキモノナリ。故ニ調査スヘキ年ハ之ヲ定ムルモ、ソノ日月ハ之ヲ限定セス。地方ニヨリ或ハ春季ニ行ノコトモアルヘク、然ラサルコトモアラン。サレバソノ報告數ハ、單ニ子午兩年中ニ調査セル數ヲ示ストイフニ止マリ、子午兩年末日、ソノ他ノ一定日ニ於ケル、現在人口數ヲ示スモノニハアラサル也。

(二) 調査スヘキ人の範圍。享保十一年ノ令ニヨレバ諸國領知ノ百姓、町人、社人、男女僧尼等、其外ノ者共迄不殘調査セラレヘキモノナリ。故ニ、公卿及ヒ武士等ニ及ハス。加之平民ノ中ニ於テモ十五歳以下ノ幼者ニツイテハ、各藩ノ制規ニ委シ、之ヲ計上スルコトヲ強制セス、故ニ後ニ示スガ如ク、或ハ當歳以上ヲ計ヘ(後見 或ハ二歳以上ヲ計算シ(後見) 或ハ十五歳以上ヲ計算ス(前見))。故ニ必スシモ全國平民ノ數ヲ盡セルモノトイフ可ラス。尙武家ニ從屬スル者ノ數ヲ除外セルコトモ、前示ノ令ニヨリテ明カナラン。ごろつば一す氏ハ前述ノ如ク人口調査ノ目的ハ財政整理ニアリトシ、從テ武士及ヒ之ニ從屬スル者ハ租稅ヲ負擔セサルヲ以テ、之ヲ計算セサルナリトイヘルモ、¹⁵⁾コノ説ハ探ルニ足ラス。封建ノ世ニ於テ武家ハ互ニソノ實力ヲ秘シ、之ヲ他ニ漏ラスコトヲ欲セサリシヲ以テ、軍人軍屬ノ數ヲ計ヘサリシ也、¹⁶⁾其他常人トシテ齡セラレサル穢多、非人ノ數ヲ除キシコト、一般ニ認メラルル處ニジテ、帳外無籍ノ者ノ加ハリ居ラサルコトモ明カ也。¹⁷⁾

15) Droppers, *ibid.* p. 260 footnote.
 16) 吹塵錄五、1頁。小宮山氏、前掲、816頁。
 17) 内田博士、前掲、2089頁上段。小宮山氏、前掲、822頁

(二)調査スヘキ地の範圍。當時ノ人口調査ハ全國ニ對スルモノニシテ、單ニ一地方ニ止マルモノニアラス。然レトモ從來琉球、蝦夷ノ二國ヲ除外セリトイフヲ以テ通説トス。又寛延三年ノ人口數ニ對シ、ソノ外ニ尙蝦夷松前ノ人口、二萬一千八百〇七人アルコトヲ記セルモノアリ。然レトモ今、吹塵錄ニ掲クル所ノ文化元年(分限ノ定ニ三)及ヒ弘化二年 諸國別人口數ヲ見ルニ、前者ニ於テハ松前、箱館、蝦夷ノ人口數四萬五千四百十七人、後者ニ於テハ松前、蝦夷ノ人口數七萬八百八十七人ヲ合算セルニ徵スレハ、蝦夷ニ就テハ、全國人口數ニ含マレ居ル場合ノ存スルコトヲ認メサル可ラス。

(四)調査ノ手段ニツイテハ、現時所謂國勢調査ノ如キ特殊ノ方法ヲ用フルコトナク、當時ノ戶籍ヨリソノ數ヲ計上セシモノナリ。即チ人別帳ニ基テ一村一郡毎ノ戶口ノ大數ヲ記シ、且前年トノ増減比較ヲ記セル人數増減書上帳ヲ作り、勘定所ニ提出セシメシモノ也。尤人別帳ナルモノハ、享保十一年以前ニモ存スル所ニシテ、享保六年ニハ特ニ戶口ヲ改ムルコトナク、ソノ當時最近ノ人別帳ニヨリテ知レ居タリシ人數ヲ注進セシメシモノナレトモ、十一年以後ニ至リテハ、子午兩年ニ特ニ戶口ヲ改メ、從テ人別帳ヲ改訂シ、コレニ基キテソノ數ヲ計上報告セシメタル也。然ラハ人別帳ナルモノハ如何ニシテ作ラルルヤトイフニ、江戸ニ於テハ、享保以後、總名主何レモ戶口ヲ檢査シテ人別帳ヲ作り、増減ヲ註記シ、毎年四月、九月ノ兩度ニ、町々ノ人數高ノミヲ、帳ニ造リテ、町年寄三ヶ所ニ出スコトトセシガ、ソノ調査不完全ナリシモノノ加ク、朝川善庵ハ「家内ノ人數ハ家々書出シノママヲ用ヒ、細密ノ調ヘハ無之」云々トイヘリ。又代官支配ニ屬セル各

18) 内田朝後モ時 博士、前考、人口ノ人、日本經濟學表ヲ見テ、2089頁上段、第五卷、第一頁、20) 小宮山氏、鈴木、前編、822頁、21) 山氏、鈴木、前編、822頁、22) 前編、鈴木、前編、822頁、23) 山氏、鈴木、前編、822頁、24) 山氏、鈴木、前編、822頁、25) 山氏、鈴木、前編、822頁、26) 山氏、鈴木、前編、822頁、27) 山氏、鈴木、前編、822頁、28) 山氏、鈴木、前編、822頁、29) 山氏、鈴木、前編、822頁、30) 山氏、鈴木、前編、822頁、31) 山氏、鈴木、前編、822頁、32) 山氏、鈴木、前編、822頁、33) 山氏、鈴木、前編、822頁、34) 山氏、鈴木、前編、822頁、35) 山氏、鈴木、前編、822頁、36) 山氏、鈴木、前編、822頁、37) 山氏、鈴木、前編、822頁、38) 山氏、鈴木、前編、822頁、39) 山氏、鈴木、前編、822頁、40) 山氏、鈴木、前編、822頁、41) 山氏、鈴木、前編、822頁、42) 山氏、鈴木、前編、822頁、43) 山氏、鈴木、前編、822頁、44) 山氏、鈴木、前編、822頁、45) 山氏、鈴木、前編、822頁、46) 山氏、鈴木、前編、822頁、47) 山氏、鈴木、前編、822頁、48) 山氏、鈴木、前編、822頁、49) 山氏、鈴木、前編、822頁、50) 山氏、鈴木、前編、822頁、51) 山氏、鈴木、前編、822頁、52) 山氏、鈴木、前編、822頁、53) 山氏、鈴木、前編、822頁、54) 山氏、鈴木、前編、822頁、55) 山氏、鈴木、前編、822頁、56) 山氏、鈴木、前編、822頁、57) 山氏、鈴木、前編、822頁、58) 山氏、鈴木、前編、822頁、59) 山氏、鈴木、前編、822頁、60) 山氏、鈴木、前編、822頁、61) 山氏、鈴木、前編、822頁、62) 山氏、鈴木、前編、822頁、63) 山氏、鈴木、前編、822頁、64) 山氏、鈴木、前編、822頁、65) 山氏、鈴木、前編、822頁、66) 山氏、鈴木、前編、822頁、67) 山氏、鈴木、前編、822頁、68) 山氏、鈴木、前編、822頁、69) 山氏、鈴木、前編、822頁、70) 山氏、鈴木、前編、822頁、71) 山氏、鈴木、前編、822頁、72) 山氏、鈴木、前編、822頁、73) 山氏、鈴木、前編、822頁、74) 山氏、鈴木、前編、822頁、75) 山氏、鈴木、前編、822頁、76) 山氏、鈴木、前編、822頁、77) 山氏、鈴木、前編、822頁、78) 山氏、鈴木、前編、822頁、79) 山氏、鈴木、前編、822頁、80) 山氏、鈴木、前編、822頁、81) 山氏、鈴木、前編、822頁、82) 山氏、鈴木、前編、822頁、83) 山氏、鈴木、前編、822頁、84) 山氏、鈴木、前編、822頁、85) 山氏、鈴木、前編、822頁、86) 山氏、鈴木、前編、822頁、87) 山氏、鈴木、前編、822頁、88) 山氏、鈴木、前編、822頁、89) 山氏、鈴木、前編、822頁、90) 山氏、鈴木、前編、822頁、91) 山氏、鈴木、前編、822頁、92) 山氏、鈴木、前編、822頁、93) 山氏、鈴木、前編、822頁、94) 山氏、鈴木、前編、822頁、95) 山氏、鈴木、前編、822頁、96) 山氏、鈴木、前編、822頁、97) 山氏、鈴木、前編、822頁、98) 山氏、鈴木、前編、822頁、99) 山氏、鈴木、前編、822頁、100) 山氏、鈴木、前編、822頁、

地ニテハ五人組ニ於テ人別改ヲナシ、人別帳ヲ造リ、名主年寄立會ヒ、之ヲ検査シテ名主ノ許ニ置キ、一村若クハ一郡毎ニ人員ヲ總計シ、増減ヲ記シテ代官所ニ備フルヲ常トセリ。然レトモ人別帳ト宗門人別改帳トノ混淆セシコトハ既ニ述ヘタル所ニシテ、寛政ノ頃ニ及ンテモ、尙大阪等ノ近畿地方ノ都會ニテハ、別ニ口數ヲ改ムル事ナク、寺請證文ヲ集メテ人別帳トナセシコトモアリシカ如シ。中井竹山ノ草茅危言ニ曰ク

「去ナカラソレヨリシテ(寺請證文ノ)コト行ハレテ以來、赤僧ハ戸口版籍ヲ掌ル官司ノ列ニ入タルヤウニナリ、大ニ權柄ニ乗シ、又民間ニテハ坊長モ、タダ寺ヨリ出セル一紙ノ宗旨證文ヲ集テ、人別帳ヲ編立ルコトニナリ、別ニ口數ヲ改ル事無、一切寺任セナリ。(中略)今日ノ弊ヲ論スルニ、都會ノ地ハ寺町モ大抵町家ニ續キタレドモ、赤僧ハ平日檀越ノ家ニ往來スルモノニ非レバ、家内ノ人數幾バク有モ一向知ベキ様ナシ、タダ家當タル者ヨリ、書付テ遣スマ、ニ、證文ヲ出シ、坊長里長モ何ク改メナク、タダ一紙ノ證文ヲ目當ニスルノミナレバ、名有テ人無モ有リ。人有テ名無モ有リ。又他國ヨリ郡下ニ來リ住スルモノ、必其地ノ寺ヲ頼ミ、宗札ヲ受ル事ニナレバ、既ニ國ノ宗旨人別ニ入り、又郡下ノ宗旨人別ニ付ハ是レ一人兩宗兩名ナリ。譬ヒ同宗ニテモ二寺證文ニ入ハ一人ニテ二人トナルニ同ジ。又奴婢ハ家長ヨリ一ニ宗旨證文ヲ取り置イテ、宗門色々ナルヲ、家長ノ寺號上下何人、皆我方宗門トシテ證札ヲ出スハ、往々一人兩宗ナリ。親元ノ人別ニ入りナガラ、又主人方ノ宗旨ニ入ハ是又往々一人兩名ナリ。混雜ノ甚タシキモノ也。坊長、里長ハ何ノ糺シモナク、其ノ儘戸籍ヲ編ア官ニ獻スルハ、總計ニテ萬人アル中ニテ二千三千ハ必重複セル虛數ナルベシ云々」²⁴⁾

又各藩ニ於テハ調査ノ方法如何ナリシヤ明カナラズト雖、神惟孝カ草茅危言謫義卷四戸口ノ事ニ於テ云ヘル所ニヨレバ、備前岡山藩等ニテハ頗ル嚴重ニ調査セフレタルモノノ如ク、前述ノ草茅危言ニイヘル所ト對照シテ頗ル興味アリ。即チ曰ク、

「近代ノ戸口ヲ改ラルルコトハ、國々其制有テ嚴密ニ改ルコト也。我故國備前ノ如キハ、宗門ハ各書付ヲ出シ、戸口人別ハ一年一度、里正坊長ヨリ各戸相糺シ、他所へ奉公ナドニ出テ有ル分ハ、悉ク他出願トテ開濟、ソノ餘ノ分ハ、改メ日限有テ、城下

24) 萩野博士、前掲、1371頁。
25) 日本經濟叢書卷十六、416-417頁。誤植アルヲ以テ木版本二種ヲ核合セリ。

町ノ分ハ、町目付同心坊長等一町ツツ一戸ゴトニ相改メ、各戸皆家内残ラス庭中ニ跪シテ、シラベテ受ク。其吏簿ヲ以テ口數ヲ引合セテ一町一村宛、不殘シラフル故、重復逃籍ノ患ヒナシ。又郡方ハ、代官里正、一村一戸ツツ相糺スコト、町方ニ同シ。扱寺ハ檀家ヨリ書出ス證札、或ハ里正坊長ノ簿帖へ印形ヲ押ノミ。僧ノ戸籍ニ預ルコト少モナシ。若寺僧ニ怠リアラハ、賸越ヨリ嚴ク咎ムル程ノコト、戸口人別ヲ漫ニ寺僧任セニテ濟スヤツノコト、都會バカリニテ、諸侯ノ國ニテハ何レモ凡ソ同ヤツナルヘシ。僧徒マカセノ國ハ有マシキコトナリト。

以上之ヲ要スルニ、當時ノ人口調査ナルモノハ必スシモ我國ノ全人口ヲ盡セシモノニアラス。人的範圍ヨリイフモ、地的範圍ヨリ見ルモ、除外セルモノ少カラス。調査ノ方法亦不備ナルヲ免レス。從テコノ調査ヲ以テ精確ナルモノナリトハ云フコトヲ得スト雖、而モ推算若クハ臆測ニヨリテ計上セシモノニハ非ス。²⁶⁾ 相當ノ根據ヲ有スルモノナルカ故ニ、人口増減ノ大勢ヲ知ル上ニ於テハ閑却スルコトヲ得サルモノ也。

四

以上ノ方法ニ基キ調査セル結果、知り得タル人口數ハ左ノ如シ。尙參考ノタメ享保六年ノ令ニ基キ注進セラレタル人口數ヲモ附記ス。思フニ享保十一年ノ調査數ノ如キハ、第一回ノ調査結果トシテ比較的適實ニ近キモノナルヘキヲ以テ、之ヲ基準トシテ指數ヲ算出シ、人口増減ノ大勢ヲ概觀スルノ便ニ供セント欲ス。(左記引用書中「數」ハ吹塵錄第五卷、小ハ小宮田氏前掲、²⁶⁾「官」ハ官中局第五卷、²⁷⁾「官」ハ官中局第五卷、²⁸⁾「官」ハ官中局第五卷、²⁹⁾「官」ハ官中局第五卷)

年 號	西 曆	男	女	計	指・數	引用書	備 考
享保六頭	一七三三頭			一七三三頭	一・一		
享保一	一七三三頭			一七三三頭	一・一		
				一七三三頭	一・一		
				一七三三頭	一・一		
				一七三三頭	一・一		

26) 内田博士、前掲、2088頁下段。
 27) 内田博士、前掲、2088頁下段、吹塵錄五、1頁參照

既ニ述ヘタルカ如ク、以上ノ數字ニハ公卿、武士及武家ニ從屬スル者ヲ含マス。無籍者極多非人ノ數ヲ加ヘス。且ツ琉球蝦夷ノ人口ヲ加ヘサルモノアリ。十五歳以下ノ者ニツイテハ、各藩ノ例規ニヨリ、不同アルノミナラス、調査ノ不完全ナルヨリ、脱漏重複セルコトモ少カラサルヘク、全國平民ノ數ニ就テモ、決シテソノ全數ヲ盡セルモノニ非ル也。故ニ實際ノ人口數ハ、以上ノ數字ヨリモ一層大ナルモノアリシコトハ、之ヲ推察スルニ難カラス。然ラハ幾何ノ數ヲ加フヘキ乎。小宮山氏ハ天保五年ノ調査數ニ對シ、明治ノ初メニ調査セル琉球蝦夷ノ二國、及ヒ華士卒穢多非人ノ五類ノ數、凡二百六十二萬人ヲ加ヘ、二千九百六十八萬餘人ヲ以テ、假リニ天保中全國ノ人口數ト推定シ、無籍人ニツイテハ調査ナキカ故ニ知ルコト能ハストイヘリ。又どろつば一す氏ハ先ツ勝伯爵ノ計算^(註)ヲ擧ケテ曰ク、「勝伯ハ武士ノ數ヲ三十五萬人ト計算シ、武士一人ニ付平均各三人ノ從者ヲ有ストセバ、從者ノ總數ハ百〇五萬人ナリ、而シテ加賀前田侯ハ十五歳以下ヲ加ヘス、備前ノ池田侯ハ二歳以下ヲ數ヘス。全國人口ニ對シテ五歳以下ノモノ約三〇%ニ歳以下ノモノ五%ニ當ルトセバ、享保十七年ノ前者ノ調査數五七六、七三四人ニ對シ約二十四萬人、後者ノ調査數三九六、五〇〇人ニ對シ約二萬人ヲ増加セサル可ラス。故ニ勝伯ノ計算ニヨルトキハ合計百六十六萬人^(定兵ノ百六十六萬八千七百六十六)ヲ加ヘサル可ラス」ト。然ルニど氏ハ之ヲ以テ少キニ失スルモノトシ、ソノ倍數例ヘハ三百七十二萬人^(定兵ノ百六十六萬八千七百六十六)ヲ加フルヲ以テ正當ニ近キモノトシ、兎ニ角、調査數ニ對シ二百萬乃至三百五十萬人ヲ加フルノ必要アルコト明カ也トイヘリ。

(註)吹塵錄第五册一頁ニハ、早ニ^(註)武士ノ數大凡三十數萬ニ過キサルヘシトイヘルガ、其他二三ノ史籍ヲ調査セシモ未ダど氏

28) 小宮山氏、前掲、822頁
29) Droppers, ibid. p. 261-262.

ノ引用セル根據ヲ求メ得サルヲ遺憾トス。

以上ノ説ハ何レモ推測ニ留マリ、尙多クノ遺漏アリ。例ヘハ小宮山氏ノ計數ニツイテ之ヲ考フルニ、天保五年ノ調査ニ於テモ、更ニ十五歳以下ノ者ニ對シ除外セラレタル數ヲ加ヘサル可ラス。又波峰須賀侯モ二歳以上ヲ計算セルノミナレバ、更ニソノ數ヲ加ヘサル可ラス。尙其他同様ノ例アルヤモ計ラレズ。而シテ波峰氏ノ計算ニ至リテハ、單ニ之ヲ倍ストイフニ留マリ、何等ノ理由ヲ示サス。其他調査ノ不完全ニ基ク脱漏重複ノ數ヲ推測スヘキ材料ヲ有セス。然レトモ此等ノ批難ハ實ハ望蜀ノ感ニ過キス、今日ニ於テソノ實數ヲ測ランコトハ殆ント不可能也。タダ以上ノ諸説ヲ綜合シテ考フレハ、調査數ニ對シ、二〇〇。〇。〇。〇。乃至三〇〇。〇。〇。〇。乃加フルノ必要アルヘク、從テ徳川時代後半ニオケル人口ハ、概算ニ千八百萬乃至三千万ノ間ヲ上下セシモノト見テ差支ナカル可シ、

(註)吉田博士ハ徳川時代ニ於ケル石高(表高及ヒ内高共)ノ關係ヨリシテ當時ノ人口數ヲ推算セリ。曰ク「石高ハ徳川時代ノ初メ即チ天正慶長ノ時分ニハ全國都合千八百萬石、ソレガ元祿頃ニナツテカラ二千六百萬石ニナリ、天保ニ至ツテ徳川幕府カ盛チ極メマシタガ三千万石ト言ツタ居ル。(中略)天正年中ニハ總石高千八百萬石トイヘハ、收穫米ガ是タケ平均ニ取レタ者ト音ハナケレバナラス。此意味カラ言ヘバ今日ハ五千萬石ノ米ガ日本全國ヲ取レル。(中略)經濟學ア申シマスレバ食物ト人口ハ動かヌ比例デアリマスカラ、五千萬石ニ對シテ五千萬人無クテハ食殘リノ米ガ腐ツテ仕舞ウ。不必要ナ物ヲ造レバ米價下落スル譯デアアルガ、ソレガ腐リモシナイ、下落モシナイ所ヲ見ルト五千萬人ノ人口ガアルトイフ事ガ分ル。即チ天保年間ハ三千万人、天正年中ハ千八百萬ノ人口ガアツタラウトイフ事ガ石高カラ推シ測ラレルノデス。又元祿年中ニハ人口ガ二千六百萬人アツタラウト思フ。(下界)」ト。コハ純然タル推算ナルガ、天保頃ノ人口三千萬トイフハ、以上説ク所ト大差ナク、注意スヘキ點也。

斯クテ徳川時代ノ後半ニオケル人口ノ數ハ略ホ明カナルガ、然ラバソノ増減ノ狀態ハ如何トイフニ、先ツ享保十一年ノ調査數ヲ基トシテ論スレハ、人口ノ増加ヲナセルハ僅カニ享保十七年、文政十一年、天保五年、弘化三年ノ四回ニシテ、他ハ何レモ減少ヲ示セリ。今假リニ最多數ヲ示セル文政十一年ノ調査ノミヲ抽出シテ之ヲ享保十一年ノ數ニ比較スルモ、百〇二年間ニ僅カニ六十五万二千四百〇二人ヲ増加セルニ過キス。即チ平均一年ニ千人ニツキ〇・二四ノ増加ニ外ナラス。〔（前上段ノ修正數ニ依リテ享保以後明治以前ノ人口ニ千八百萬ナリ三千萬人ニ増加シタルモノト假定ス）尤此等ノ數字ハ頗ル不完全ナルモノナリト雖、人口増減ノ大勢ハ之ヲ看取スルコトヲ得ヘク、一般ニ之ヲ言ヘバ、享保以後明治以前ニ於テハ、人口ノ増加ハ決シテ急速ナラス、寧ロ靜止ノ狀態ニ在リトイフヲ適當トス。

五

上述ノ如ク享保以後人口ハ寧ロ靜止ノ狀態ヲ呈シタルモノナルガ、然ラハ享保以前ニアリテハ如何トイフニ、當時未タ全國人口ノ調査若クハ書上ケ行ハレサリシコトナレバ、ソノ全數ヲ知ルニ由ナシト雖、吉宗カ享保六年ノ人口注進以來、年ヲ逐フテ次第ニ人口ノ増殖スルヲ見テ、更ニ比較考察ノ材料ニ供センカタメ、十萬石以上ノ大名ニシテ八十年已來所替セラレサルモノ十家ニ對シ、七八十年以來封内ノ人口高ヲ記セルモノアラハ差出スヘキ旨ヲ令シタルニ應ヘテ、前田家其他ヨリ報告セシ所ノ數ヲ基トシテ之ヲ考フレハ、一般人口増減ノ大勢ヲトスルコトヲ得ヘキ也。今ソノ數ヲ掲クレハ次ノ如シ³¹⁾。

31) 太田南畝、竹橋別集、卷八。小宮山氏、前掲、817—820頁及比蓮齋主人、享保以後六大藩ノ人口、スタチスチツク雜誌六六號ニモソノ一部分ヲ掲ク、

大名	領地、石高	調査年次	調査年齢	人口數	増減數	千人に對 一年間ノ均	備考
松平加賀守 (前田)	加賀越中能登近 江ノ内 百二萬五千石餘	享保五(一七三〇) 同 一七(一七三三)	十歳以上	五七、七五 五七、七五	一二年間ニ 四、九〇増	三・七	
松平陸奥守 (伊達)	陸奥、常陸、下 總、近江ノ内 六十二萬五十六 石餘	元祿三(一六九〇) 同 一五(一七〇三) 享保一七(一七三三)	當歳以上 同	五九、三二 六二、七三 六三、七三	一二年間ニ 八、〇〇増 三〇年間ニ 二〇、〇〇増	二・五 一・六	
松平大隅守 (島津)	大隅薩摩一圓目 向之内 六十萬五千石餘	元祿二(一六八九) 享保一七(一七三三)	當歳以上 同	二六、〇二 三九、九〇	三四年間ニ 六、九四増	一五・六	
松平大炊頭 (池田)	備前一圓、備中 之内池田内匠頭 領知共 三十四萬二百石	貞享三(一六八六) 寶永三(一七〇六) 享保一七(一七三三)	二歳以上 同	八四、五三 一〇〇、三五	二〇年間ニ 三、三三増 二六年間ニ 二、七〇増	五・三 二・七	大炊頭領知備中國分備前之内二 郡并城下町人別不明 上記ノ數ハ貞享三年人別不明ノ 所々人數十三萬四百四十六人ナ 除ケルモノナリ 上記ノ數ハ貞享三年人別不明ノ 所々人數十七萬二千五百四十人 ナ除ケルモノナリ
藤堂大學頭	伊賀一圓、伊勢 山城大和下總之 内 三十二萬三千九 百五十石餘	寬文五(一六八五) 元祿三(一六八八) 享保一七(一七三三)	當歳以上 同	二五、三〇 六四、三三	一五年間ニ 三、〇〇増 四二年間ニ 三、二六増	四・五 〇・二	伊勢内寺領ニヶ村人別不明 右同斷 右ノ寺領ニヶ村人別百四十六人 ナ除ケリ

松平淡路守 (蜂須賀)	淡路阿波一國 二十五萬七千石	寛文五(一六五) 元祿元(一六八) 享保七(一七三)	同	二歳以上	三〇、八〇〇 三六、七五二 三七、八六三	二三年間ニ 一、八六三増	一〇、八三	
酒井左衛門尉	出羽之内 十四萬七十七石	元祿七(一六四) 享保七(一七三)	同	當歳以上	一三、三六三 一三、一六四	三八年間ニ 四七、二増	四、九八	
丹羽左京大夫	陸奥之内 十萬七千七百餘石	貞享二(一六五) 元祿五(一七〇) 享保七(一七三)	同	當歳以上	七、一五二 七、三〇〇 七、七九〇	一七年間ニ 二、七九増	二、四	七ヶ村人別不明 上記ノ數ハ右七ヶ村人別五千二百三十七人ヲ除ケルモノナリ 上記ノ數ハ右七ヶ村人別五千三百三十人ヲ除ケルモノナリ
南部修理大夫	陸奥之内 十萬石	寛文九(一六九) 元祿六(一七〇) 享保七(一七三)	同	當歳以上	二、四八、一五五 三〇、一〇〇 三三、一〇九	三四年間ニ 六〇、五七増 一九年間ニ 一、六七増	五、八一 一、七〇	

(備考)以上九藩ノ外、酒井讚岐守ヘモ人口數ノ上申ヲ命シタルガ、同藩ニテハ『毎年人數相改候得共、事濟候以後、右書付
殘置不申候ニ付、享保五年以前之人數不相知候事』トイヒ、人數ヲ知ルコトヲ得ザリキ。

右ノ表ニヨツテ之ヲ觀レバ、減少ヲ示セルモノハ僅カニ一個ノ場合アルノミニシテ、他ハ悉ク増加ヲ示セリ。尤ソノ増加率ニハ大ナル懸隔アリ、又僅カニ右九藩ノ事例ヲ以テ、全國人口ノ場合ニ推シ及ホスハ無謀ノ譏ヲ免レスト雖、而モ一一ノ數ヲ離レ、大體ノ上ヨリ見テ人口増加ノ大

勢ヲ察スルコトヲ得ヘク、ソノ増加率ハ享保ノ人口調査以後ニオケルヨリモ大ナルモナルガ如ク、又以上九藩ノ場合ニ於テモ、時代ノ早キ方ノ増加率ガ後時代ノ増加率ヨリモ一般ニ大ナルモナルヲ認ムヘキ也。サレハ江戸時代ノ前半ニ於テハ人口ハ概シテ速ニ増殖シタルニ反シ、ソノ後半ニ及ンテハ寧ロ靜止ノ狀ヲ呈シ、ソノ増殖ノ甚タ遅タリシコトヲ唱フルハ必スシモ不當ニ非ル可シ。³³⁾

然ラハンノ理由ハ如何カノ戰國時代ノ如ク所在爭亂相ツギ、騷擾絶ニ間ナク、多數ノ男子殊ニ最モ倔強ナル壯者カ最先ニ戰場ニ出テテ生命ヲ鴻毛ノ輕キニ比シテ劍戟相見ユルノ時ニ當リテハ、人口ノ増殖スルカ如キコトハ夢想ダモスル能ハザル處ナリ。然ルニ徳川幕府ハコノ戰國爭亂ノ後ヲ受ケテ國內ヲ平定シ、前後約二世紀半ニ亘リテ太平ノ世ヲ現出シタルモノニシテ、戰爭ハ昔物語トナリ、軍事ハ一種ノ儀禮格式ヲ示スニ過キササルノ具トナリ了レリ。カクノ如キ時ニアリテハ人民ソノ堵ニ安ンジ農工商各ソノ業ヲ勵ミ、或ハ新田ノ開發、外來作物ノ栽培、耕作方法ノ改善行ハレ、或ハ生糸織物等ノ手工業發達シ、各地特産物ノ興隆ニ應ジテ商業モ亦進歩シ、和平ノ氣、海内ニ充ツルト共ニ國民ノ生活安穩トナリ、人口モ亦次第ニ増殖セシヤ疑ナシ。是レ實ニ徳川時代ノ前半ニ於テ、人口ノ増殖概シテ速カナリシ所以ナラスンバ非ル也。否カクノ如キ戰亂後ノ平和時代ニ於テ、人口ノ速カニ増殖スルコトハ、必スシモ徳川時代³⁴⁾ ミニ限リタルコトニハ非ス、廣ク一般ニ生スル所ノ現象ニシテ學者ノ既ニ屢論セル所也。

然ルニコノ産業ノ發達、人口ノ増殖ハ一定ノ限度ニ達シタル後ニ於テハ、更ニ一層ノ進歩ヲナ

³³⁾ 内田博士、前掲、208頁上段。Droppers, *ibid.* p. 262-263.

³⁴⁾ Mayo-Smith, *Statistics and Sociology*. 1910 p. 73. Droppers, *ibid.* p. 262.

スコトヲ得サリシガ如シ。蓋、國內ノ狀勢ハ太平ノ餘弊ニ染ミ、一般ニ保守退嬰ニ陥リ、耆倭安逸ノ風次第ニ行ハレテ、農村ノ疲弊トナリ、商工業ハ多ク株仲間ヲ組織シ、特權ヲ擁シテソノ發達ヲ期シ難ク、殊ニ多大ノ人口ヲ容ルヘキ大工業ノ如キハ未タ存在セス、國民ノ生活ハ次第ニ困難ヲ加フルニ至レリ。況ヤ三代將軍以後對外關係ハ殆ト鎖國のトナリ、之ニヨリテ國內ノ產業ニ刺戟ヲ與ヘ、國民ノ意氣ヲ鼓舞シ、若クハ餘剩人口ヲ海外ニ移スノ途ナカリシオヤ。國家内外ノ狀勢ニシテ、既ニ此ノ如クナル以上ハ一定ノ限度以上ニ多大ノ人口ヲ包容シ得サルコトハ自ラ明カナルモノアラシ。然ルニコノ一般的傾向ニ加ヘテ、尙飢饉、疫癘等ノ災厄ハ、頻々トシテ起リ、コレカ爲メニ生命ヲ失ヒシモノ少カラス。或ハ租稅負擔ノ過重ニヨリ、又ハ勤儉令ノ影響ニヨリ、若クハ生活難ニヨリテ、種々ノ形式ノ下ニ人口ノ増加スルコトヲ避ケ、殊ニ墮胎、陰殺ノ惡風行ハレ、此等ノ所謂積極の阻障ト豫防の制限トハ、共ニ人口ノ増加ヲ妨クルコト頗ル大ナルモノアリキ。是レ德川時代ノ後半ニ於ケル人口ヲシテ寧ろ靜止ノ狀態ニ存セシメタル所以ナリトス。³⁵⁾

(註) 石ニ述ヘタル人口増加ニ對スル積極的阻障ト豫防的制限トニシキヲ考フルニ、(イ) 德川時代ニ於テハ、農耕ノ技術漸次進歩シタルカ如シト雖、尙甚タ幼稚ニシテ之レニヨリテ自然ニ對抗スルノ力未タ大ナラス。又交通ノ便頗ル整ハサリシヲ以テ一地方ノ凶作ヲ他地方ノ豐饒ニヨリテ相殺スルコト難ク、飢饉ノ現象ヲ生スルコト少カラサリキ。日本災異志³⁶⁾第一卷ノ示ス所ニヨレハ享保六年以降天保八年ニ至ルマテ飢饉ノ災厄ニ遭フコト實ニ二十六回ナリ。而シテコレ等飢饉ノ歲ニ當リテ、飢饉及疾病ノタメノ死スル者甚タ多ク、殊ニ享保十七年、天明三、四、七年、天保七、八年等ニ於テハ最慘烈ヲ極メタルカ如シ。佐藤信淵ノ農政本論ニ曰ク『享保十七壬子ノ年西海道諸國凶作甚シク、且又疾熱大ニ流行シ、豊前小倉ノ領内ニテ男女死スル者七萬人、肥前國佐賀領内ニテ男女死スルモノ十二萬人、筑前國ニ於テモ男女死スルコト極メテ夥シト。又一話

35) 内田博士、前掲、2088頁上段。Droppers, *ibid.* p. 259.
36) 小島果著、明治二十七年刊

一 昔ニ曰ク『近ク尋メルニ享保十七年壬子ノ歲、西海道ノ疫病ト歟飢ニ豐前小倉ノ内男女七萬人ノ疫餓死アリ。肥前佐賀ノ内、男女十二萬餘ノ疫餓死アリ、又筑前國内凡ソ三十六萬七千八百餘口ノ中、男女疫餓ノ死人九萬六千七百二十口ト記セルトカヤ』天明ノ飢饉ニツイテハ本多利明ノ經世秘策西域物語等ニソノ記事多シ。ソノ一節ニ曰ク『癸卯(天明三年)以後三々半凶歲飢饉ニシテ奥州一ヶ國ノ餓死人數凡二百萬人餘』云々ト。コレ等ニ示ス所ノ數モトヨリ精確ナラスト雖、死亡者ノ頗ル多カリシコトハ之ヲ知ルニ足ラン。(37) 次ニ又當時ニ於テハ衛生上ノ思想及ヒ設備ノ進歩セザリシタメ疫病、痘瘡等ノ流行ニヨリテ人ノ死亡スルモノ多カリシコトヲ認メサル可ラス。(38) 更ニ墮胎殺兒ノ弊風ニ至リテハ、當時奥州、阿蘇、二毛、常陸、九州、土佐其他各地ニ行ハレ、之カ爲メ人口減少シ、荒蕪地増加シ、農村益疲弊セシコトヲ説ケルモノ少カラス、今ソノ二三ヲ擧ケンニ、正保三年ノ江戸町飢ニ看板ヲ懸ケテ子ヲ死シノ商賣ヲナスコトヲ禁シタルカ如キハ當時墮胎ヲ業トシテ口ナ糶スル者ノアリシコトヲ證スルモノトイフヘク、明和年間ニ『百姓共大勢子供有之候得ハ、出生ノ子ヲ産座ニテ直チニ殺シ候國柄モ有之段相聞不仁ノ至リニ候。以來右體之儀無之様、村役人ハ勿論百姓ヘモ相互ニ心ヲ付可申、常陸下總邊ニテハ別而右取沙汰有之由、若外ヨリ相顯ハルルニオイテハ可爲由事也』ト令センハ關東地方ニ於テ墮胎陰殺ノ盛行シタルユトナ示スモノナリ。尙在際信淵ノ經濟要録、七ニ曰ク『故ニ往々其兒ヲ殺害スル者有リ。奥羽關東諸國ハ殊ニ多シ、中國、四國、九州等モ子ヲ殺ス者多ケレトモ、産サル前ニ腹内ニテ密ニ此ヲ殺スガ故ニ、外見ハ殺サザルカ如シ。(中略)當時出羽奥州ノ兩國バカリニテモ赤子ヲ殺スユト年々六七萬人ヲ下ラス』ト。本多利明ハ『開引子ト荒シ作りハ箱根峠ヨリ東諸國ノ風俗ヲナリトイヒ、天明飢饉後、夥シキ亡處出來セシニモ拘ラス、』矢張り今ニ開引子ノ惡俗止マザレバ農民減少シ終ニ斷絶ノ勢ヒアリト説キ、三木廣隆ノ經國本義ニハ兩總、二毛、常陸、江戸近在迄モ開引ノ行ハルルコトヲ記シ、窓ノ須佐美二六〇頁ニハ庄内地方ニテ此弊風アルコトヲイヒ、これがはなしニモ、關東、奥州筋、九州地方等ニコノ風習アルコトヲ嘆セリ。尙明治六年岩代國信夫郡福島町町米澤屋 八外二人ガ子孫繁昌手引草ナルモノヲ施板シ、開引子ノ弊風ヲ矯正セント試ミ、之ニ倣ヒテ更ニ同文ノ書ヲ再ヒ他人カ施本セシカ如キ事實ハ奥州方面ニオケル事情ヲ示スモノトイフヘシ、土佐地方ニアハ、一家ニハ一男二女ヲ擧グルヲ以テ限度トスルノ風行ハレ、既ニ寶曆四年ニハ藩主山内家ヨリ之ヲ制スルノ令ヲ發シタリ。(45) 其他農業小兒示教辨ニハ農村ニ於テ女子ヲ陰殺スルタメ男子ノ出生スルコトヲ説ケルカ如キ、其例多シ。

37) 平編、第五卷、第44頁、日本社會事乘三版
 38) 史學雜誌、第17卷、第364頁、日本社會事乘三版
 39) 經世人口政策、第17卷、第43頁以下
 40) 戰後經濟學、第7卷、第57頁
 41) 吳文忠、同上、第66頁
 42) 吳氏前掲、第7卷、第45頁
 43) 吳氏前掲、第7卷、第45頁
 44) 吳氏前掲、第7卷、第45頁
 45) 吳氏前掲、第7卷、第45頁

尙ざろつばす氏ハ、勤儉令ニツキテソノ影響ハ普通ニ考ヘラルルヨリモ甚ツキモノアリシナラントイヒ、且上述ノ諸原因ノ外、地震、大火、洪水等ノ天災、刑罰峻酷ニシテ死刑ノ多カリシコト、九州地方ニ於ケル男色、武士ノ醜態、及ヒ當時一般ニ風俗頹廢シテ賣女ノ甚タ多カリシコト等ヲモ列擧シタリ。⁴⁶⁾此等ノ諸原因が果シテ當時ノ出生死亡率ニ甚大ナル影響ヲ與フル程有力ナリシヤ否ヤハ、尙研究ノ餘地アルヘシ。

以上述ヘタル飢饉、疫病、墮胎、陰殺等ハ勿論徳川時代ノ初期ニ於テモ之レアリト雖、一般ニ人口増加ノ勢大ナル場合ト、一般社會狀態カ最早ヤ多數ノ人口ヲ容ルル能ハサルカ如キニ立チ到リシ場合トニ於テハ、此等事件ノ影響ハ到底日ヲ同シクシテ談ス可ラサル也。加之、墮胎陰殺ノ如キハ、後年ニ至リテ生活ノ困難ヲ加フルト共ニ盛ニ行ハレ、又飢饉ノ影響ハ次ニ述フルカ如ク最モ著キモノナルカ、而モ享保、天明、天保ノ三大飢饉カ、タタサヘ人口増加ノ困難ナル徳川時代ノ後半ニ於テ生シタルカ如キ、何レモ徳川後期ニ於ケル人口ノ増加ヲ一層甚シク阻害セシモノトイハサル可ラス。

終リニ一言スヘキコトハ以上諸種ノ人口増加ニ對スル阻障ノ中、飢饉ノ影響ノ最モ甚シキコト是レ也。蓋飢饉ノ際ニ當リテハ、餓死及ヒ飢餓ヨリ生スル疾病ノ爲メニ人ヲシテ死ニ到ラシメ、直接ニ死亡率ヲ増大スルノミナラス、又間接ニ飢饉カ人口ノ増加ニ對シテ大ナル影響ヲ與フル處アレハ也。然ラハンノ間接ノ影響トハ何ソヤ。思フニ飢饉ノ後ニ於テハ、一般住民ノ經濟狀態ハ劣惡トナリ、體力ハ疲弊シ、且物質ノ供給不十分ナル結果トシテ、容易ニ従前ノ生活ヲ恢復スルコトヲ得ス。爲メニ人口ノ増殖スル程度ハ極メテ緩漫ナリ。今之ヲ疫病ノ場合ト比較シテ考フルニ、コノ場合ニ於テハンノ影響ハ一時的ナリ。蓋疫病終熄ノ後ニ於テハ、一方ニハ健全ナル人口

46) Droppers, *ibid.* p. 264 et seq.

ノ殘存セルアリ。他方ニハ物資ノ供給ハ人口ノ減少セシタメ却テ豊富トナリ、勞働者ノ缺乏ヨリシテ賃銀ハ騰貴シ、ソノ經濟狀態ハ一般ニ良好トナル。故ニ以前ノ人口ヲ恢復スルコト頗ル速カナレハ也。然ルニ飢饉ノ場合ニアリテハ、前述ノ如ク、ソノ事情全ク相反シ、一時ニ多數ノ死者ヲ生スルノミナラス。ソノ影響巨久的ニシテ人口ヲ恢復スルコト容易ナラサル也。⁴⁷⁾而モコノコトハ單純ナル理論ニ非ス。幕府ノ人口調査ニ於テモアラハレオル所也。例ヘハ天明六年調査ノ人口數カ、安永九年ノ調査ニ比シテ九十二萬人ノ減少ヲ示シ、寛政四年ノ調査カ天明六年ノ調査ニ比シテ更ニ約二十萬人ヲ減シ、結局兩回ニテ百十萬人ノ減少ヲ示セルハ、全ク天明三年乃至七年ノ大飢饉ノ結果ヲ現ハセルモノトイフヘシ。而シテ寛政十年ニハ天明六年ノ數以上ヲ恢復シタリト雖、未タ安永九年ノ數ニ及ハサリシ也。其他延享元年ノ調査數ニアラハレタル減少ハ、享保十七年秋ヨリ翌十八年ニ至ル西國諸國蝗害飢饉ノ影響ニ由リ、弘化三年ノ調査數カ天保五年ノ數ニ及ハサルハ、天保七八年ノ飢饉ニヨリ減少セル人口ヲ、未タ恢復スルヲ得サルコトヲ示スモノナリ。⁴⁸⁾是ニ由リテ此ヲ觀ルニ、如何ニ人口ニ對スル飢饉ノ直接間接ノ影響ノ大ナルカラ知ルニ足ラン。

六

以上論スル所ニヨリ徳川時代ニ於ケル西國全人口ノ狀態ハ略ホ明カナラン。而シテ當時ニ於ケル江戸、京都、大阪其他各都市人口數ヲ知ルコトモ亦必要ナリト雖、コハ姑ク他日ノ研究ニ譲リ、茲ニハタダ幕府ノ人口政策ニツキ一言ヲ費シ以テ本稿ヲ終ラントス。然ラハ幕府ハ當時、人口ニ對シテ如何ナル政策ヲ採リシヤトイフニ、一般ニ人口ノ増加ヲ獎勵シ、又ハソノ減少ヲ防止スル

47) Droppers, *ibid.* p. 273-274.
48) 小宮山氏、前掲、823—824頁

カ如キ策ヲ探リシコトナキカ如シト雖、タダ人口ノ都市集中ニ對シテ、之ヲ防遏スルノ方法ヲ行フニ至リシコトハ注意スヘキ點ナリトス。寛政二年十一月ノ町觸ヲ見ルニ、曰ク

一、在方ニリ當地エ出居候者故郷エ立歸度存候得共歸用金難調候歟立歸候テモ夫食農具代杯差支候モノハ、町役人差添可願出候。吟味之上、夫御手當被下候。若シ村方ニ故障之儀有之歟、身寄者無之、田畑モ所持不致故郷之外ニテモ百姓ニ成リ申度存候者ハ、前文ノ御手當被下手餘地等有之團圍エ差遣シ、相應之田知可被下候。妻子召連度旨相願候ハバ可任其意候。

一、右ハ御料所ヨリ出居候モノニカキラス、私領等之者モ當戊申ヨリ來々子年迄三ヶ年之内ニ願ヒ出ルニ於テハ、御料并小給所寺社杯之モノハ、前書之通、御手當被下歸村被仰付。萬石以上領分之者ハ其領主へ引渡歸村申付ニテ可有之候。尤右之趣ハ前々ヨリ去酉年迄之内當地エ出居候モノニ限り候。當年以來當地エ出候者ハ願出候共、沙汰ニ及ハス候。江戸出生之者願候ハハ、農業モ仕馴サル事ニ候間、吟味之上時宜ニヨリ荒地等エ被遣候事モ可有之候。

右之趣町中エ相觸置候。歸郷之儀、願出候ハバ御勘定奉行ヨリ可引渡候間、可被得其意候。尤領分之者、荒地多之場所ハ成メケ他國エ不出様手當可被致事ニ候。且又歸郷之モノ引渡候節、タトヒ帳外之者ニ候トモ以別紙歸住致サセ百姓ニイタシ候共、山海ノ稼申付候トモ、歩人奉公ニ成トモ可被致候。若又兼々咎有之尋中之者ニテモ候ハハ、其分本罪ヨリ一等級ク仕置可被致候。引取百姓ニイタシ候上、逃去候ハハ其段可被相届候。

(註)本令ハ寛政五年四月町觸ヲ以テ「此後モ去ル酉年迄ニ當地エ出候モノハ、願出次第先達ヲ相觸候通可願出候」トイヒ、之ヲ繼續施行スルコトトセリ。

カクノ如ク、幕府ハ寛政二年以來歸農ノ方針ヲ採リシガ、未タ充分ナル效果ヲ見ル能ハサリシカ如シ。コノコトハ天保九年閏四月ノ代官ニ對スル令ヲ見ルモ明カ也。即チ曰ク、

「諸國人別之儀追年相増候へ共、國府ニ寄、草席之類ニ見合候得バ、過半人數減少イタシ候場所モ有之、御府内人別モ相増候得共、多分ハ他國出生ノ者ニ付、寛政以來御入用ヲモ不被爲厭、歸農ノ儀、厚御世話有之候得共、兎角近國之内ニモ人數減少荒地多之場所モ有之、御府内之人別ハ次第相増候ニ付而ハ、生者寡ク、食者衆ク相成候故、自然ト凶年之御救等モ莫大之事ニ至リ、往々御世話行届兼可申哉難計事ニ付、戶籍ノ義駕ト詮議イタシ可申上旨、越前守殿御沙汰有之候間、在々人別増方、御府内人別減方、取締之義、見込之慮、無腹藏取調、銘々印封ヲ以而早々可被申問候事」

49) 徳川十五代史、十、90-91頁。續地方落穂集、日本經濟叢書卷十、346頁以下
50) 徳川十五代史、十、135頁
51) 萩野博士 前掲、1361頁

越ヘテ天保十四年三月ノ令ニ曰ク

「一、在方之者、當地ニ出、居馴候ニ隨ヒ故郷へ立戻リ候念慮絶シ、其儘人別ニ加リ候モノ追年相増、在方人別相減候趣相聞不可然儀ニ付、今般悉ク相改、不殘歸郷可被仰付候處、商賣等相始妻子等持候モノモ一般ニ差戻ニ相成候而ハ可致難澁筋ニ付、別格之御仁恵ヲ以、是迄年來人別ニ加リ居候分者歸郷之御沙汰ニハ不被及、以後取締方左之通被仰出候。

一、在方之モノ身上相仕舞江戸人別ニ入候儀自今以後決而相成大工左官木挽袖其外職分ニ付、當分出稼之タメ出府致シ同居又者店持或ハ奉公稼ニ出候モノハ月限り年限リ等ヲ以、村役人ニ申立、御代官領主地頭ニ願出候得、村役人連印御代官所ハ手代、私領ハ家來奥書印形之免許狀相渡造候間、出府之上家主或者主人ニ差出且何方ニ同居并奉公濟致候旨、村方ニ通達ニオヨ

ヒ、期月年限ニ至リ候ハハ、一旦村方ニ立歸リ、何ケ度出府致候共、右同様之手續ニ相心得可申事。(但書)

一、廻廻修行六部順禮等ニ罷出候モノ中略以來者村役人共ヨリ御代官領主地頭ニ願出、前書之振合ヲ以許狀相渡可申事。

一、出家致候モノ共之儀以來無遺失、所役入ヨリ御代官領主地頭ニ相願申濟之上添簡、又者奥書可申請、且吉田白川家陰陽師神事舞太夫等ヨリ新規門下ニ相成、又者百姓町人ニ而身分相應之許狀請候モノハ勿論、假令前々ヨリ配下ニ而、神道葬祭或ハ繼自許狀請候節モ、其度々支配領主等ニ相願添簡又者奥書ヲ以、其筋ヨリ許狀可申請事。

一、在方人別改方等附之趣相聞候。向後死亡出生嫁娶并出稼奉公稼之モノ共巨細ニ相改、當人印形取之、印形改候ハハ其段斷書致置、職分ニ付出稼奉公稼之モノ、期月期年ニ不立展候ハハ、其段御代官領主地頭ニ訴出可申事。

一、近年御府内ニ入込裏店等借受居候モノニハ、妻子等モ無之、一期住同様之モノモ可有之、左様之類者、早々村方ニ呼戻可申事。

右之趣村役人共厚相心得。勸農之趣意深切ニ申諭村方人別相減不申様精々心附可申候。云々、

即チ、自今以後、在方ノ者ノ江戸ニ移住スルヲ禁シ、又既ニ江戸ニ入込ノル者ニテモ、永年營業ヲナシ又ハ妻子眷屬ヲ有スルモノノ外、一期住同様ノ者ハ歸郷セシメ、同時ニ農民ノ江戸ニ出稼スル者ニ對シテハ、ソノ年限ヲ定メ、期ニ及ベバ必ス歸農セシム。其他、僮侶、神主陰陽師等トナリ、若クハ廻國修行六部順禮ヲナス者等ニ對シ取締ヲ嚴ニセシカ如キ、畢竟コレニヨリテ農

村人口ノ減退ヲ防ギ、勸農ノ途ヲ盡サントセシニ外ナラサル也。⁵³⁾

之ヲ要スルニ幕府ノ都市人口集中ニ對スル政策ハ、二段ノ經過ヲ經タルカ如シ。即チソノ始メニ當リテハ頗ル消極的方針ヲ探リ、單ニ歸郷希望者ニ對シテ特殊ノ便宜ヲ與ヘ、成ルヘク歸郷ヲ多カラシムルニ努メシニ過キスト雖、天保十四年ニ至リテハ人返シノ方法ヲ實行シ其他ノ取締ヲ嚴ニシ、頗ル積極的強制的色彩ヲ帶フルニ至リシモノトス。是レ庶政ノ釐革ニ努メシ水野忠邦カ、農村ノ疲弊ヲ救濟シ、之レカ人口ノ充實ヲハカランカ爲メニ探リシ所ノ政策ナリ。

(附言) 小宮山氏國史論纂所掲論文ハ、ソノ始メ皇典講究所講演第四卷三六、三七號ニ掲載セラレシモノ也。同氏ノ「近世人口ノ蕃殖」⁵⁴⁾ハソノ内容右ノ論文ト大差ナシ。又萩野博士法制論纂所掲論文モ、ソノ始メ皇典講究所講演五卷六卷ニ亘リテ連載セラレシモノナリ。横山氏、食貨志略卷二、戸口ノ條ニ説ケル近世戸口ハ學藝志林所掲論文ト大差ナシ。尙黒川眞頼氏「日本人口總計考」ハ黒川眞頼全集第五、四七四頁以下ニ、高橋勝弘氏ノ「伊能氏ノ古今戸口考」ハ統計集誌、大正五年一月號ニ在リ。古事類苑政治部第三、五〇二頁以下ニモ人口ノコトヲ載ス。河合利安氏「近世(江戸幕府時代)ノ人口」⁵⁵⁾(大正三年六月)ハ内田博士ノ經濟大辭書卷五(大正二年五月刊)前掲論文中、徳川時代ニ關スル部分ト、内容文章共ニ殆ンド甲乙ナク、記事ノ配列ニ前後ノ差アルノミ。

53) 工藤武重氏著、水野越前、(偉人史叢第十五卷) 52頁以下

54) 如蘭社話卷七

55) 統計學雜誌三三八號

